哲学する本棚

「旅」展示書籍のご紹介

1 人はなぜ旅をするのか

わざわざ住み慣れた町から出発して、
時間とお金をかけて、新しい土地についたのに、
すぐに自分の町へと戻っていく。
どうして、人は旅をするのだろう。

『観光のまなざし』

ジョン・アーリ、ヨーナス・ラースン／著
法政大学出版局

何かを見るために旅に出るのかもしれない。あらゆるものが観光の対象となり、その見方はガイドブックなどが教えてくれる。ツーリストとそのまなざしについての古典的研究書。

2 日常から逃げ出そう

何かから逃げ出すために旅に出る人がいる。
ありきたりで、がんじがらめの日常。退屈。仕事。締め切り。
・・・本当に逃げられる？

『こんな町、つまんない！』

マーク・ローゼンタール／作・絵
徳間書店

退屈な日常から抜け出すために旅に出る人もいるけれど、日常は本当に退屈？
「なーんにも、おこらないんだ、この町じゃ!」と退屈している男の子の背後で、つぎつぎハプニングがおこって町じゅう大騒ぎになる絵本。

3 ちょっと変わった旅

近くへの旅、遠くへの旅、タイムトラベル、夢の旅、
いろいろな旅。宇宙旅行は空想ではなくなったけれど、
人はどこまで行けるのか？

『猫町』

萩原朔太郎／著　金井田英津子／絵
長崎出版

「どこへ行ってみても、同じような人間ばかり」だという旅に飽きた旅人が、不思議な旅行法を発見した。人は住み慣れた町や、よく見知った町でも異世界の旅を楽しめる。詩人が書いた「散文詩風の小説」。

4 世界の広がり

旅に出ると新しい世界が広がる。見なれない地図を見、
聞きなれない地名を発音するだけでも、ワクワクする。
世界って何だろう？

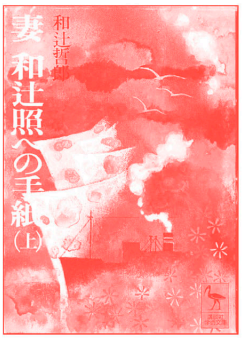
『旅をする木』

星野道夫／著　文藝春秋

自分が東京に暮らしている同じ瞬間に、北海道のどこかの山でヒグマが生きている。当たり前だけれど不思議。それは十代の星野道夫がはじめて感覚的に「世界」を意識した経験だった。
アラスカを旅した写真家のエッセイ集。

5 やっぱり我が家が一番

旅がどれだけ素敵でも、やっぱり我が家が一番？
私の家、私のふるさとって何だろう？



『妻　和辻照への手紙』（上・下）

和辻哲郎／著　講談社

「私はやっぱり照のそばにいて子供たちの顔を見ていなければ、落ち着いて勉強ができない」。
西田幾多郎の同僚、和辻哲郎が留学中にホームシックにかかりながら書いた妻・照への手紙。その留学の成果は有名な『風土論』となる。

6 哲学者の旅

同じ町で暮らし続けたカント。
馬に乗って考えたモンテーニュ。
何度も引っ越しをしたけれど、
留学はできなかった幾多郎。

『カント先生の散歩』

池内紀／著　潮出版社

大哲学者カントは一生のほとんどをケーニヒスベルクで過ごした。それなのに世界で最も早い時期に大学で「地理学」の講義をして大人気になった。そんな人間カントの伝記を名エッセイストが書いた。

図書室の紹介

哲学館の1階の図書室には、哲学に初めて触れる方でも楽しく読める絵本や入門書から、本格的に勉強をしたい方のための本まで、さまざまな哲学の本が 9,000 冊以上並んでいます。なかには西田幾多郎が生きていた時代の古い本もあります。どなたでも閲覧できますので、気軽に入室して探索してみてください（17:00 まで）。